

アネモネ

内藤真理子

源氏物語の教室に通っている。月に一度行くのだが、その度に季節に合った花や、掛け軸が飾ってある。

前回の花は、淡い紫とピンクのアネモネだった。お軸は、原有富画『五七の桐』で、鳳凰と桐が描かれていた。アネモネは一輪草で、花は幅の広い柔らかな花びらが幾重にも重なって八重に咲いていておらかな印象の花だった。

その日の授業は、源氏物語の中でも際立って物笑いの種にされている女君〈近江の君〉の話である。

玉鬘十帖の中の〈常夏〉に出てくる話で、常夏とは玉鬘の母、夕顔のことである。

夕顔は頭中将との間に女の子がいたが、それを伝えながゆえに疎遠になった。源氏は頭中将が〈雨夜の品定め〉で、理想の女だと自慢していた夕顔を見つけ、某の院に連れ出す。そこで彼女は物の怪に襲われて死んでしまう。その時夕顔の供をしていた右近を源氏が引き取った。

それから十七年、右近は偶然に、立派に成長した玉鬘を見つけて源氏の元に連れ帰る。

玉鬘は乳母に育てられたのだが、才色兼備の申し分のない女性だと評判になった。

現在は内大臣である頭中将は、その女性を源氏の子だと思いこみ、自分にもそんな子がいないかと方々探した。そして近江で〈近江の君〉を見つけた。

だが、残念ながらこちらは才色兼備ではなく、人に笑われる存在として、源氏物語のお笑いタレントとして登場する。早口で喋り、わずかばかりの教養をひけらかし、意見をすると、地方の豪族の娘なのだろう、妙に素直で「宮仕えをしたらどんな仕事でもやりましょう、便器取りのお掃除役でも何でも」と言っ、父の内大臣を仰天させている。

その日に飾ってあったアネモネの花は、どことなく世間離れがしていて、近江の君の話に合っているように思った。

そこで小話を一席

弟が姉さんに借金を申し込んだそうなの

姉は一輪の花を差し出した

弟は不思議に思い、その花をしばしばと見て「それは何ですか」

姉はひとこと「アネモネ」

お後がよろしいようで